

## 国際会議報告

第 7 回材料集合組織国際会議の  
印象記\*

鈴木 竹 四\*\*

材料集合組織国際会議 (ICOTOM : International Conference on Textures of Materials) は、1968 年の Clausthal (西ドイツ) における第 1 回以来 2~3 年ごとにヨーロッパを中心に開かれてきた。第 5 回の Aachen (西ドイツ) 会議から日本人研究者も多数参加するようになり第 6 回 (1981 年) は東京で開かれた。

今回は第 7 回で、1984 年 9 月 17 日~21 日の 5 日間にわたりオランダ材料科学会主催で Noordwijkerhout で開催された。会議の行われた Leeuwenhorst congress center は Amsterdam から南西約 30 km、民家がちらほら見える閑静な場所にあつた。そこに 22 カ国からの参加者約 130 人 (日本人は 16 人) が会議期間中寝食を共にした。

初日は 8 時 15 分から JONGENBURGER 教授の開会の言葉で始まり、LÜCKE 教授による故 VERBRAAK 教授 (当初今回の会議の実行委員長であつたが、1983 年 3 月 23 日に亡くなられた) への追悼講演・招待講演さらに一般講演とつづいた。口頭発表の会場は一つしかなく、1 日 10 件程度の発表が、昼食と 4 回の Coffee break をはさんで午後 5 時過ぎまで行われた。夕食後 8 時~10 時の 2 時間、2~4 の会場でポスターセッションおよび討論が行われた。発表件数は招待講演 8 件 (日本からは長嶋晋一横浜国大教授、武智弘新日鉄 (株) 薄板研究センター所長の 2 件)、口頭一般発表 27 件、ポスターセッション 89 件の計 124 件で下記の八つの topics に分類された。(カッコ内は日本人の発表件数を示す)。1) 変形集合組織 26 件 (2)、2) 再結晶集合組織 19 件 (4)、3) 変態集合組織 5 件 (1)、4) 膜および薄層の集合組織 3 件、5) 工業的応用 (鋼および鉄合金) 10 件 (4)、6) 工業的応用 (非鉄、その他の材料) 14 件 (1)、7) 性質と集合組織の関係 29 件 (4)、8) 集合組織の決定・表現に関する実験・計算技法 18 件。筆者は 17 日の午後 topic 5) で Ti 添加低炭素鋼板の再結晶集合組織について発表した。

\* 本国際会議出席にあたっては、日本鉄鋼協会日方向学術振興交付金が賦与されました。

\*\* 東京大学工学部 工博

個々の内容については、会議と同時に出版された Proceedings (Edited by C. M. BRAKMAN, P. JONGENBURGER and E. J. MITTEMEIJER) を参照していただきたい。筆者が感じた今回の会議の特徴は次の二点である。第一点は、従来ヨーロッパ諸国では面心立方金属を中心とした集合組織の基礎的研究が主であつたが、鋼板の連続焼鈍を意識した研究が見られるようになったこと、第二点は、ODF (orientation distribution function) およびベクトル法についても 3 次元結晶方位表示法の数学的議論にとどまらず実際の材料特に鉄鋼材料への応用研究が多くなつてきたことである。会議の運営についてはポスターセッションによる発表件数が多かつた。この場合、発表者にとっては拘束時間が長く、他の人の発表に対する討論時間が十分に得られない等のデメリットがあるが、他方視聴者にとっては、関心度に応じた視聴ができること、broken English で討論できること等が魅力的であつた。

19 日は Conference Excursion でオランダ南西部のライン川河口で行われている Delta Works を見学に行つた。オランダは国土の 4 分の 1 が海拔 0 m 以下で今でも大規模な干拓が行われている。国土が歴史的に増加してきた地図を見ながら、中近東の戦争で浪費されている膨大な資金と各国の協力のもとで、干拓によつてパレスチナ人民に豊かな安住の地を提供できないものかと考えたりもした。

19 日夜は 8 時から Conference dinner が催された。dinner の始めに集合組織研究の草分け的存在である WASSERMANN 教授の 82 歳の誕生日を祝つて全員で乾杯をした。教授は今回の会議においても連名で研究発表されており、ポスターセッションの会場にも討論のため姿を見せておられた。dinner の会場で 3 年後の本会議がアメリカで開かれることが発表され、KALLEN 教授がユーモアを交えて挨拶された。その夜の dinner は延々と 12 時までつづいた。

今回の会議は外的誘惑の少ない場所で合宿形式で行われたこともあつて、研究者間の討論、対話の機会是非常に多くあつた。ポーランドの某教授がいみじくもつぶやかれたように Texture family の会合といつた言葉がびつたり合いそうな雰囲気であつた。それにしてもポスターセッションの熱気から解放された後、Congress center のバーで日・米・欧の研究者が談笑しながら飲んだビールの味は忘れ難い。

最後に本会議の出席費用は日本鉄鋼協会第二回日方向学術振興交付金の援助によつたことを記す。